

まだまだ冷たく暗い日が続いていますが、春は確実に近づいて来ています。手元のカレンダーでは2月上旬、毎日日照時間が4分も長くなってきています。そしてカーニバルが終わると、春はすぐそこまで。今回はそのカーニバルについて。「カーニバル」という言葉はイタリア語の「肉よ、さらば(Carnaval)」から来ているそうです。しかしお隣のドイツでは「ファストナハト」「ファスナット」と呼ばれ、ドイツ語の「ファーゼルン(浮かれて騒ぐ)」「ファーゼン(馬鹿騒ぎをする)」などから派生した名前です。つまりカーニバルの習慣はキリスト教的意味合いとゲルマン時代の非キリスト教的春祭りの習慣が四句節前の無礼講に結びついたものだそうです。確かに教会歴にはカーニバルはなく、民間習俗的なお祭と呼べます。四句節(careme)ですが、これは復活祭を身も心も清潔に迎えるために、「灰の水曜日(mercredi de cinder)」から復活祭前日までの6週間半を断食や肉食、飲酒を禁じている期間を言います。この期間、日曜日を除いて40日になり、ノアの洪水の日数や、イスラエル人が荒野を流離った日数、シナイ山でモーゼが絶食した日数、イエスが荒野で断食した日数と同じになります。「灰の水曜日」の由来は中世、キリスト教徒がこの日に教会で人間は埃であることを再確認するために灰で従事を書いてもらったことだそうです。9世紀には四句節の前にお祭する習慣が見られ、四句節前の3日間を「jours gra」と呼び、直前の火曜日を「mardi gra」と呼ぶようになりました。カーニバルの準備を一番初めに始めるのはドイツのシュヴァーベン地方の「愚者組合」とか「馬鹿連」などの人たちで、なんと1月6日の三王礼拝の日に皮鞭を鳴らして「カーニバルがやって来るぞ」と町や村に知らせます。この日を「春の始まりの日」として仲間で冗談を言い合ったり、ふざけた衣装を着飾ったりします。

ベルギーのカーニバルといえば2003年ユネスコ世界遺産に認定された Binche が有名です。街の人口は3万2千人ほどの小さな街でブリュッセルから40分程で行くことができます。この街ができたのは1120年頃で歴史のある街です。この街には既に1395年にカーニバルの喧騒が他の街と同じようにあったと伝えられています。しかしこの街を有名にしたのはカルロス5世(charles Quint)が息子を従えMary de Hongrie 主催の1週間にわたる大饗宴に招かれたことからです。この豪華絢爛な催しは遠くまで「Binche の饗宴以上のものはない」と伝わりました。そのイメージに相応しいようにカーニバルも盛大になったと伝えられています。さて当日の主演は「Gille」と呼ばれる男達です。胸周りに布切れを巻きつけ大きくし、そのうえにフェルト上の黒、黄、赤の麻製の着とズボンを身に付け、ベルトに9つの鐘を付け小刻みに歩く度に軽快なリズムが響きます。手には「Ramon」と呼ばれる柳の小枝の束を持ち、片手には柳の籠にたくさんのオレンジを入れています。また午前中は「Masque de cite」と呼ばれる仮面を被り、午後からはダチョウの羽で飾られた帽子を被ります。靴はポプラの木靴で、軽快なリズムを奏でて街中を練り歩きます。彼らの衣装は一見してエキゾチックなものとなります。これはスペイン占領時代にスペイン人たちから新大陸やインカの話聞きそのイメージでデザインしたと言われていました。また実際にインカの人達が連れてこられたとも言われています。また「Gille」の呼び名は当時スペインで多く見られた「Gil」から来ているとも言われています。「Gille」が最初に記録に載るのは1795年ですから、時代背景もスペイン説が正しいと思われる。「Gille」の胸の周りを大きくするのは「昔、近くにせむし男が住んでいて、しょっちゅう森の中で笛を吹いていた。その笛の音がとてもすばらしく、森の妖精が背中のお尻を取ってくれた。その話を聞いて同じようなせむし男が森で笛を吹くと余りにひどかったので妖精は怒り、前の男のお尻をその男の胸につけた」という話が由来です。なんだか「お尻取り爺さん」の話に似ていますね。カーニバルで騒がしくたっぴり踊るのは、地面に刺激を与え、作物の方策や子孫繁栄を願ったものが起源かと言われていいますので、ゲルマン時代の春祭りがカーニバルの発祥だという話に信憑性ができますね。そして相撲の土俵入りにも通じますね。「せむし男」の話でも「地面に刺激を与える」話でも日本とどっちが本家かとあれこれ想像するのも楽しいものです。

さて今年の Binche のカーニバルは2月19, 20, 21日です。特に21日は深夜まで大騒ぎをして過ごします。方々からオレンジが飛んできますので当たらないように気をつけないといけません。では楽しいカーニバルを！